

主 題： 敵であるサタンの敗北 7

聖書箇所： ヨハネの黙示録 13章 3-10節

海から上って来た一匹の獣について、私たちは13章から学びを始めました。その獣とはいったいどれなのか？獣の正体を見て来ました。また、獣に与えられた権威についても2節から学びました。

☆海から上って来た一匹の獣について

1. 獣の正体

この獣は「偽キリスト」であるということを見ました。この獣にはサタンと同じように、10本の角と7つの頭があり、その角には十の冠があることから、レオン・モーリス師が言うように「獣はサタンと密接に結ばれ、実に、受肉した悪のような存在である。」と、悪がそのまま人になったような人物であると言うのです。私たちが今まで見たことがないような悪の塊というか、そのような存在であると言うわけです。

また同時に、この獣とは「ローマ帝国」であるということも見ました。2節に書かれている動物たち、このように書かれていました。「私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようにであった。」と、まさに、これはダニエルが預言していた内容と一致します。ダニエル書7章には4頭の大きな獣が海から上がって来た様子が書かれています(ダニエル7:3-8)。獅子はバビロン、熊はメドペルシャ、ひょうはギリシャ、そして、第四の獣、それはローマであると。

2. 獣の権威

サタンは「この獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。」(2b節)ということを見ました。サタンはこのことによってすべてのことから手を引いたのではなく、彼はこの獣を通してこれまで以上に働こうとしている、そのことを私たちはこの中で見たのです。獣はまさにサタンの代理人のような存在として、サタンの計画を成し遂げようとするのです。この獣は神に逆らい続けるものです。皆さんに思い出していただきたいのは、この後何が起こるのか？ということです。この後、主の約束された千年王国が始まるのです。サタンがこの獣を通して、千年王国が来ないようにと最後の最後までその神の計画に逆らい続け、それを妨げようとするのです。まさに、そのことを私たちは見ているのです。

今日は3節から、この海から上がって来た一匹の獣について、その特徴を見ていきます。

3. 欺き・惑わす者 3, 4節

3節に「その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直ってしまった。…」とあります。致命的な傷を負ったこの獣、その傷が奇跡的に回復するということです。非常に難しい箇所です。今から皆さんに二つの代表的な解釈をご紹介します。その上で、私たちが取る解釈を説明したいと思います。

◎二つの代表的な解釈 3節

(1) これは「歴史的人物」であるという解釈

ある人たちはローマ皇帝であった「ネロ」、またある人たちは「イスカリオテのユダ」ではないかと言います。死んでいた彼らがよみがえって来ると言うのです。なぜ、ここに「ユダ」という名前が出て来るのか？実は、ユダも偽キリストも「滅びの子」という名前で呼ばれているからです(ヨハネ17:12「わたしは彼らと一しょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためです。」、Ⅱテサロニケ2:3「だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。」)と、そこから偽キリストとは、イスカリオテのユダがよみがえって来ることではないかというのです。

また、紀元68年に自殺したネロがよみがえって来るのではないかと言います。なぜなら、ネロの復活というのは実は神話になっているからです。そこからネロが復活するのではないかと、このような解釈が広まっているのです。

(2) これは「ローマ帝国」のことであるという解釈

確かに、この獣はローマ帝国を指しているということを見ました。ここで見ていただきたいのは「死んでいると思われたローマ帝国が、今や生き返ろうとしている、そのことを指しているのではないか？」ということです。このような解釈がなされています。

歴史的人物なのか？それともローマ帝国なのか？ 私たちが取る解釈は次の通りです。

結論： これらの解釈の問題

ここで教えられているこの獣、よみがえって来るこの人物、これは「偽キリスト」のことだろうというのが私たちの取る解釈です。なぜ、先に紹介した二つの解釈を取らないのか？と言うと、

(1)の「ネロの復活の神話」と話しましたが、ヨハネがそのことを信じてここに書いているのか？です。あくまでも「神話」です。当時のクリスチャンたちも異教の神話などを信じるかどうかです。また、イスカリオテのユダがよみがえったとしてもだれか気付きますか？だれも見たことがありません。ですから、こういう解釈は受け入れることが出来ないのです。

(2)の「ローマ帝国」という解釈に関しては文法的に見て受け入れることが出来ません。そのことはまた後で説明します。

ですから、このような根拠をもって、恐らく、3節が教えているこの「致命的な傷を負ってそこから奇跡的に回復する」のは「偽キリスト」のことだろうと、そのように思うのです。

☆何を教えているのか？

1) その正体

その根拠として、3節「その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直ってしまった。」、「その致命的な…」と新改訳聖書では「その」と訳されていますが、実は、ここは人称代名詞が使われています。ですから「彼の致命的な傷…」と訳せるわけです。人称代名詞が使われていることから、これは帝国のことではなく、人物のことであろうと解釈するのです。

2) その策略

サタンは巧妙にこの出来事を使って、彼自身が望んでいる働きを為そうとしています。彼の策略、そのことがここに書かれています。3節「死んだと思われた偽キリストがその死からよみがえる」と言ったときに、幾つかの疑問が出て来ます。偽キリストが死んだと書かれているが、本当に死んだのかどうかです。これも正直なところ、聖書は明確に教えてはいません。また、もう一つ出て来る疑問は、もし彼が本当に死んだとしたら、サタンはその死人を生かす力を持っているのかどうかです。ジョン・ワルブード師は「サタンの力は偉大であるが、彼が死んだ者のいのちを生き返らせるかどうか疑問である。」と言っています。ですから、確かなことはよく分からないのです。いずれにしろ、サタンがこの出来事を通して何をしようとしているのか、それは明らかです。

* この出来事の目的は「信じていない人々を欺くため」である

それは「主イエス・キリストの救いを信じていない人々を惑わすため」です。それがサタンの特徴です。サタンは嘘つきです。ありとあらゆることをもって彼は偽りを伝えます。主イエス・キリストが言われました。ヨハネ8：44「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」また、黙示録12：9にもサタンについてこのように説明されていました。「こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。」、「惑わす」とあります。これがサタンです。「惑わし続ける」のです。嘘でもって人々を欺き続けていくのです。そういう存在です。20章にも、千年王国の間サタンはどうなるのか？3、8、10節「:3 底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。…」、「諸国の民を惑わすことのないように」とあります。その目的で閉じ込められると言います。「:8 地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海べの砂のようである。」、サタンは解放されて何をするのか？惑わすのです。「:10 そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。…」、「彼らを惑わした」とあります。もう十分です。サタンはそのような存在なのです。常に嘘をもって、人々を神から引き離そうと、神のみこころに逆らい続けていくようにと働き続けるのです。

この出来事の結果、どのようなことが起こるのか？そのことを見てください。13：3b—4a節「そこで、全地は驚いて、その獣に従い、そして、竜を拝んだ。獣に権威を与えたのが竜だからである。また、彼らは獣をも拝んで…」と。そして、12節にも「この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。」、14節「また、あの獣の前で行うことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」と。つまり、致命的な傷を負って死んだかと思ったこの偽キリストが、そこから奇跡的に回復することによって何が起こるのか？

* この獣を、そして、その背後にいる竜、サタンを人々が崇拝するということ

彼らを神として崇拝すると言うのです。人々を信じ込ませるその方法は、この偽キリストの奇跡的な回復という出来事です。ここまで話して来たのですが、私は恐らくこの偽キリストは死ぬことがないと

思っています。これはサタンによる見事な欺瞞です。というのは、「打ち殺されたかと思われた」と書かれています。これは「死へと殺害されたような」、「致命傷を負ったかと思われた」という意味ですが、注意して見てください。非常に巧妙です。新改訳聖書ではギリシャ語をこのように訳しています。これは5章6節にも出て来ますが、日本語の訳は違います。でも、同じギリシャ語が並びます。5：6では「さらに私は、御座——そこには、四つの生き物がいる——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があった。その目は、全世界に遣わされた神の七つの御霊である。」とあって、「ほふられたと見える」と訳しています。これは「主イエス・キリスト」のことです。イエスの死のことです。それと同じギリシャ語が3節に並んでいるのです。

つまり、この獣、偽キリストが死んだかのように人々の前に見えるのです。そして、そこから回復する姿、それはイエスの「十字架と復活」に非常に似ていませんか？まさに、それがここで起こるのです。なぜ、人々から見たら死んだように思えるこの偽キリストが、そこからよみがえって来るのか？これは「イエス・キリストの死と復活」を模倣したものです。

*その目的は？

なぜ、わざわざこのようなことをするのか？先ほどから見て来ているように「欺くため」にです。サタンはこうしてその当時の人々がイエス・キリストの救いに与らないようにと働くのです。なぜなら、このような出来事を見たら人々は間違いなく、この偽キリストこそが、偽ではなく本当のキリストであると信じるからです。死んだと思った人物がそこから回復して来るのです。死んだと思った人物がそこからよみがえって来るのです。そうして、この偽キリストは自分が真のキリストであるとして人々を欺くのです。これはサタンがやっていることそのものです。サタンは神になろうとしたわけです。「いと高き方のようになろう」（イザヤ14：14）とした、つまり、神になろうとするのです。自分自身が被造物、神に造られたものでありながら、創造主なる神の上に自分を置こうとしたわけです。そして、創造主なる神だけが受けるにふさわしい被造物すべてによつての礼拝、服従、愛をだまし取るのです。レオン・モーリス師は「これは悪者がキリスト教を模倣するものとして描かれている箇所の一つである。」と言います。私たちが学ばなければいけないことは「サタンは非常に巧妙」だということです。大変巧妙に人々を惑わすのです。

3) その成果 4節

サタンの働きの成果を見てください。

(1) 偶像崇拝 : 偶像礼拝が始まったことが記されています。4節「そして、竜を拝んだ。獣に權威を与えたのが竜だからである。また彼らは獣をも拝んで、…」、この出来事の結果、世の中はこの獣に抵抗しても無駄だと思ふのです。なぜなら、死んでいたと思われていた人物がそこからよみがえって来るからです。だれがこの人物に勝てるかというわけです。面白いことは「竜を拝む」と書かれており、同時に、「獣をも拝む」と書かれています。

つまり、皆さん、真唯一の神であるイエス・キリストを信じる信仰以外はすべて、サタンを崇拝することになっているということです。「聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。」（申命記6：4）と申命記のみことばが教えるように、神はただお一人です。すべてをお造りになりすべてを治めている神はお一人です。その神以外のものを神として崇拝する偶像崇拝、それはその神としての対象を崇拝しているのですが、実は、そのすべての崇拝はその背後にいるサタンを崇拝するものであると言います。パウロはIコリント10：19-20で偶像に対するささげ物に関してこのように言っています。「19 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。20 いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」と。神ではなく悪霊にささげられていると言っています。

つまり、その人たちは自分たちの信じる神々に向かってささげ物をしますが、パウロが教えることは、でも、それはすべて神ではなくサタンに対するものだということです。ですから、聖書は明確に、神になりたがっている、そして、この世の神として君臨しているサタンが人々を惑わして、間違っても唯一の神を信じその方に従わないようにと、偽りの神でないものを神として崇拝し続けるように騙し続けていると教えます。ですから、この真の神以外を崇拝することは、すべてサタンを崇拝することになるのです。この出来事を通して、人々はその獣を崇拝し、そして、それはまさに竜、サタンを崇拝することになると、そのことをこの箇所は私たちに教えてくれています。

(2) 称賛 : その後にこの獣に対する称賛が記されています。「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう」と言った。」と。お気付きになる通り、この二つの質問は「修辞疑問」です。つまり、答えはもうはっきりしているのです。「だれがこの獣に比べられよう。」、答えは「だれもいません」です。「だれがこれと戦うことができよう。」、これも「だれもいません。」です。面白いことは、レ

オン・モーリス師がこう言います。「『だれがこの獣に比べられよう』は、旧約の同じような表現を戯画化したものである。」と。というのは、旧約聖書の中にこれと同じような表現があるのです。でも、このような称賛が向けられている対象は神にです。

出エジプト記 15 : 11 「【主】よ。神々のうち、だれかあなたのような方があるでしょうか。だれがあなたのように、聖であって力強く、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行うことができましょうか。主よ。神々のうち、だれがあなたのような方があるでしょうか。」と、修辞疑問です。答えは「だれもいません」です。

詩篇 35 : 10 「私のすべての骨は言いましょう。「【主】よ。だれか、あなたのような方があるでしょうか。悩む者を、彼よりも強い者から救い出す方。そうです。悩む者、貧しい者を、奪い取る者から。」。「【主】よ。だれか、あなたのような方があるでしょうか。」、答えは「いません」です。

ですから、この二箇所を見て、彼らは「神さま、あなただけが礼拝にふさわしいお方です。あなたのような方はどこにも存在していません。」と神を称えているのです。その神に向けられるべき称賛がサタンに対して向けられるということです。この出来事を通して、神が受けるべき称賛をサタンは自分のものにします。

Ⅱテサロニケ 2 : 10 a 「また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。…」、サタンは必死になって人々を欺き続けて行くのです。「人々」というときに、特に、ここで記されているのは、救いを信じていない人たちに対するものです。そのことは後で見ます。でも同時に、クリスチャンに対してもサタンは欺き続けていきます。皆さんも経験ありませんか？主イエスに従って行くよりも、少しこの世的に生きることも良いのではないかと。主に従い続けているクリスチャンであるよりも、少しぐらい妥協しても良いのではないかと。だから、私たちはいつもみことばに立たないといけないのです。そんなことを神は教えていません。私たちは主イエス・キリストの恵みによって救われた者として、主に従い続けて行く者として生まれ変わった者として、主に服従していきます。そのときに、私たちは神の祝福をいただき、世の人々に対して神がどんなに偉大なお方であることを示していくことができます。

でも、サタンは必死になって信仰者であるあなたが妥協するように、この世に染まっていくようにと誘惑をします。そのことは皆さんよくご存じです。偶像崇拜が始まり、そして、神への称賛がこの獣、竜に対して向けられるということでした。

4) 偽キリストの活動 5-8節

(1) その活動

a) 傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ 5, 6節

5節「この獣は、傲慢なことを言い、」とは神でないのに神であるかのようにして話すということです。ダニエル書の中には、この偽キリストに関して「大きなことを語る口があった」と書かれています（ダニエル書 7 : 8 「私とその角を注意して見ていると、その間から、もう一本の小さな角が出て来たが、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があった。」）。その通り、この偽キリストは非常に傲慢な態度をもって、傲慢なことを語り続けるのです。自分を神としたこの存在は、そのような態度をもって語り続けるのです。

「けがしごとを言う口を与えられ、…」とも書かれています。6節に詳しい説明が記されています。「そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをののしった。」と。「神の御名と…ののしった。」、これは神ご自身を、そして、神のご性質をののしることです。神の愛を、神の恵みを、神の聖さ正しさをののしることです。また、「その幕屋」と書かれています。「すなわち、天に住む者たちをののしった。」とあって、主を信じる人たち、すでに天に凱旋した人たちをものしりと言うのです。恐らく、彼らは天に行ったと言っている、そうやって騙し続けるのでしょう。とんでもない彼らは騙されている、彼らは滅んでしまったと言います。ここにある「天に住む者たち」とは、天に凱旋したクリスチャンたちのことを言うのですが、マッカーサー先生は「天にいる聖い天使たちをものしりすることになる」と言います。ということは、天にいるすでに救われた者たちだけでない、そこにいる天使たちものしり。そのようなことをこの偽キリストが行うと言うのです。

b) 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた 7節

この偽キリストは聖徒たちに「戦いをいどんで」（「聖徒たち」とはクリスチャンたちです）、クリスチャンたちと戦いをなすということです。なぜ、この偽キリストはクリスチャンたちを攻撃するのか？それは彼らがこの偽キリストを崇拝しないからです。サタンを崇拝しないからです。そして、この偽キリストにとってクリスチャンたちの存在は世界戦略を為すために邪魔なのでしょう。そこで彼らを苦しめ彼らを殺していきます。ですから、このとき大変多くのクリスチャンたちが殉教することが想像できます。つまり、患難時代において信仰を持ったクリスチャンたちのことです。ダニエル書 7 : 23には

「彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。』」と書かれています。偽キリストが大変な災いをもたらすということ、そのことを見て取ることができます。大変な迫害です。

また、「あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」、つまり、この偽キリストは全世界を支配するという事です。これまで様々な帝国がこの地上に生まれて来ました。でも、だれも成し得なかったこと、「全世界を支配すること」、それがこの人物によって成されるということです。ジョン・ワルブード師はこう言っています。「世界制覇の夢はいま初めて完全に実現した。これはキリストの千年王国に対応するサタンの国であり、サタンの邪悪さと人間の悪が神の許可によってこのように究極的に現わされたのである。」と。これはすべて神の許可のもとにです。しかし、千年王国が生まれる前にこの偽キリストが世界を治めると言います。こうして、最初に見て来たように、偽キリスト、つまり、サタンは神の王国が地上に到来することを妨げようとするのです。必死になってその妨げを為し続けて行こうとするわけです。

c) 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる 8 節

この偽キリストの活動の三つ目は8節に記されています。サタンを拝むようになるということです。だれがそれをするのか? 「地に住む者みな」です。この地に住んでいるすべての人々のことです。彼らは「拝むようになる」と、これは未来形です。この地上に住んでいるすべての者たち、よく見ると、8節に「地に住む者で、」と、そして、「ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書き記されていない者はみな」、「ここに名が乗っていない者はみな」と、人類を二つのグループに分けています。一つのグループはこの小羊のいのちの書に名前が載っている人たち、片方のグループはそのいのちの書に名前が載っていない人たちです。ですから、この「地に住む人たち」と言ったときにだれを指しているのかは明確です。このいのちの書に名前が記されていない人たち、すなわち、救いを拒んでいる者たちすべてということです。なぜなら、彼らは「小羊のいのちの書に世の初めからその名の書き記されていない者たち」だからです。

この「地に住んでいるすべての人々」とは「未信者のこと」を指しています。黙示録の、

13 : 12 「この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。」

13 : 14 「また、あの獣の前で行うことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」

3 : 10 「あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」

6 : 10 「彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」

8 : 13 「また私は見た。一羽の鷲が中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」

11 : 10 「また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。」

17 : 2, 8 「:2 地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」 「:8 あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現れるのを見て驚きます。」

未信者の人へ :

この人たちとは「神によって選ばれていなかった者たち」と、皆さんご覧になるでしょう。その通りです。でも、多くの主イエス・キリストの救いを拒んでいる人たちは、この真理を裏手にとって、永遠のさばきに至るときにこのように言います。「私がこうして地獄に行くのは、永遠のさばきに至るのは、神さま、あなたが私を選んでくださらなかったからです。私が地獄に行く責任は私にあるのではなくて、選んでくださらなかった神さま、あなたにあるのです。」と。でも、残念ながら、あなたが地獄に行くことを神のせいにすることはできないのです。「神が私を選んでくださらなかったから、私は地獄行きなんです」と言って、神を責めることはできないのです。

なぜか? その理由を言います。そのような方がいないことを期待しますが、もし、この中で、まだイエス・キリストの救いを信じていない方がいるとしましょう。あなたは主イエス・キリストの救いのことをお聞きになり、神の真理をお聞きになっている、それでいてあなたは、その救いを自らの意志をもって拒み続けています。神があなたを招いてくださっているのに、あなた自身のご自分の意志をもって

それを拒んでいるのです。それを神のせいにできますか？あなたが神を拒むという選択を継続しているのです。

ですから、聖書はこのように私たちに教えます。Ⅱテサロニケ1：7-9「：7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。：8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。：9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」、主イエス・キリストが戻って来られさばきを下されるときのことです。8節「そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」と、主が帰って来られたときに選ばれていない人たちに報復するとは言っていない。主がさばきを下すために帰って来られたときに、人々がさばかれるのはどうしてか？彼らが「主イエスの福音に従わないという選択をしたから」です。神のせいだとは言っていない。一人ひとりの誤った罪の選択のゆえだと教えているのです。

そして、9節「そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」、永遠の地獄に行くと言います。なぜですか？主の救いを自分の意志で拒み続けているからです。同じⅡテサロニケ2：10-12にも「：10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。：11 それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。：12 それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」と書かれている通りです。ヨハネ3：18には「御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれています。」とあります。

私たちがすべきことは、自分の名前がいのちの書に記されているかどうかを考えることではないのです。私はこのまま、この主の救いとこのすばらしい恵みを拒み続けるのか？それとも、悔い改めてこの救いをいただくとするのか？そのどちらかです。今あなたの前に提示されている神の救いを拒み続けて行くのか、そのことを悔い改めて受け入れようとするのか、その選択を考えるべきだと言います。

ですから、一人一人神の前に立って、その罪が明らかにされ、そして、主が備えてくださった救いを拒んだということが明らかにされ、それゆえに、永遠の地獄が宣告されるときに、未信者はだれ一人として「神さま、あなたが私を選ばなかったからです」と、そのように神を責めることはできないのです。永遠の地獄に行くのはその人が永遠の地獄を選択するからです。永遠の滅びに行くのはその人が永遠の滅びを選択するからです。みな永遠の滅びがふさわしいのです。でも、神はその中で私たちに救いを与えてくださった。救い主を送り、完全な救いを備えてくださり、そして、時間を与え、我々一人ひとり罪人がその救いに与るようにと主は待ってくださっています。それでも罪人はそれを受け入れようとしない。だからです。あなたが永遠の地獄に行くときにあなたは神を責めることができない。あなた自身が自らの意志でこの神の救いを拒んだのです。そして、拒み続けているのです。

***いのちの主の名が記されている者は、絶対に忘れられることはない**

その保証： その上で、黙示録13：8を見ると、この小羊のいのちの書に名前が記されていない人がいるのは確かですが、記されている人がいることも確かです。ヨハネはこのようにしてクリスチャンたちにこのメッセージを与えるのです。このことを明らかにすることによって、迫害の中にいるクリスチャンたちに対してヨハネは大切な保証を与えようとするのです。というのは、この「小羊のいのちの書」というのは「ほふられた」とつながっています。つまり、イエス・キリストはほふられた小羊として、完全な救いを成し遂げてくださったからです。その方が自分のいのちをもって救ってくださった人たち、その人たちの名前はいのちの書に載っているのです。そこでヨハネは言うのです。「主がいのちを捨てて救ってくださったあなたを主が手放すことは絶対にない。」と。

「自分が救われていると思っている」ということではありません。「神が救ってくださったこと」を言っているのです。神が救ってくださったら、その人には確実に神の働きが始まります。どれだけのことを知っているかではありません。どのように生き方が変えられていくかです。救われていると思っている未信者はこの世に溢れています。聖書の教える救いとは神のみわざであり、神のみわざがその人のうちに始まるのなら、その人はただ信じるだけでなく、その人の生き方そのものが変わって来るのです。これが神の救いです。

そのような救いに与っているこの患難時代のクリスチャンたちに対してヨハネが教えることは、このいのちの書に名前が記されているあなたたちは絶対に救いを失うことはないということです。そして、その約束は同じように、いのちの書に名前が記されているこの患難時代の前に生きている私たちにも適応されるのです。いのちの書に名前が記されている私たち、救いに与っている者は絶対に滅びることがない！主が私たちを守り支え続けてくださるのです。ですから、ヨハネが言いたいことは「救いに与っている者を神はお見捨てになることは絶対にない。ゆえに、あなたが救いを失うことは絶対にない。」

です。ローマ8：38、39をご覧ください。「38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」。

確かに、悪が横行し大変な苦しみを経験している。でも、彼らができること、私たちクリスチャンを迫害する者たちができることは、私たちのこの肉体のいのちを奪うことだけです。私たちの救いをどうすることもできないのです。私たちの永遠をどうすることもできないのです。そうしてヨハネは、彼らを慰め励まそうとするのです。神の計画は必ず成ると言うのです。悪の束の間の勢力、悪がはびこるのはわずかな間だと言います。

(2) その期間 5 b 節

5節の後半を見てください。このような獣の活動の期間が決められています。「四十二か月間活動する権威を与えられた。」とあります。42か月間、1260日、3年半です。その間で終わるのです。いつまでも悪がはびこるものではありません。必ず、この悪をさばく神のさばきが下るのです。

(3) その力 5、7節

そして、この偽キリストの力について、5節に「与えられ」という動詞が2回出て来ます。「けがしごとを言う口を与えられ、」と「四十二か月間活動する権威を与えられた。」と、これらは同じギリシャ語です。7節の最後には「…国民を支配する権威を与えられた。」とあります。三つ出て来ましたが、実は、ギリシャ語では四つ出て来ています。その一つは新改訳では「与えられ」とは訳さないで「許され」と訳されています。7節に「…打ち勝つことが許され、」と、同じギリシャ語が他では「与えられ」と訳されていて、ここでは「許され」と訳されているのです。これらの動詞はすべて受動態、受け身です。つまり、この偽キリストはだれからこの力をもらうのか？ということ。考えられるのは、神なのかサタンなのか？そのどちらかです。サタンからこの力をもらったとすれば、なぜ、これが3年半で終わってしまうのか？42ヶ月で終わってしまうのか？サタンが力を与えるのなら、恐らく、もっと長く続くはず。これは神が与えるのです。私たちには分かり得ない神の完全なご計画に基づいて、神はこれを良しとなさり、この偽キリストがこのサタンが最後のあがきをするその期間を良しとされたのです。その期間は3年と半、1260日、42ヶ月間です。

つまり、サタンはどんなに強くてどんなにクレバーでも、神の許可なしには何もできないのです。そして最後に、自分を神の上に置こうとしたこのサタンは、必ず、主によって完全に完膚無きまでに滅ぼされるのです。そのことが定まっているのです。どんなにサタンが知恵を働かせようと、この神に勝利することは不可能なのです。感謝なことに、我々クリスチャンはサタンの側にいないのです。神の側にいるのです。

5) 勧め 9, 10節

そして最後に、9-10節に勧めが記されています。9節「耳のある者は聞きなさい。」と。新約聖書の中に15回出て来ます。重要な真理が語られるときにこのように言われたのです。その真理とは、10節「とりこになるべき者は、とりこにされて行く。」、これは恐らく、現実の人生を受容することを教えているのでしょう。とりこ、捕虜になる者たちもいたのでしょう。捕えられて行く者たちがいたのでしょう。そこで主が言われます。「すべて神の摂理に基づいている。主を信頼しなさい。」と。そういうことが起こるからです。

次を見てください。「剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならない。」と。復讐と関連していることです。剣で殺す者は殺したように殺されるということです。もし、キリスト者が剣を取るなら信仰を証することはできません。つまり、皆さん、私たちはこのようにイエスを信じる信仰を持っています。その私たちを迫害し苦しめる人たちに対して、剣をもって対抗しようとはしないのです。その方法は主の方法ではないのです。確かに、いろんなことが周りに起こっています。でも、こうしてみことばが私たちに教えてくれることは「神に任せよ」ということです。

すでに見て来たように、すべてのことは神のご計画に基づいている。神の完全な摂理の許にあるのです。あなたが心配したからといって、あなたが剣を持ち上げたからといって、一時的に何かが変わったとしても、神の計画は変わらないのです。それなら、私たちはどうすべきか？最後を見てください。「…ここに聖徒の忍耐と信仰がある。」と書かれています。私たちに必要なのは「信仰と忍耐」だと言うのです。「どんな時にも、主のみわざが成されることを信じなさい！」と。

ここに記されているのは、患難時代の後半に多くのクリスチャンたちが大変な苦しみを受けるということ、多くのクリスチャンたちが殉教するということでした。主がヨハネを通して教えることは「心配しなくていい。確かに、大変な苦しみがあるけれど、わたしを信頼していなさい。主の完全なみこころが成されるように忍耐を持って歩み続けなさい！」です。「運命に身を任せなさい」というような運命論ではありません。「主が主権者である」ということを明らかにしているのです。「神は必ず善とみこ

ころを行われるお方である。そのことを確信しなさい。」とそのメッセージを最後に与えるのです。

どんな時にも主を信頼しなさいと、そんな信頼をもって、皆さん歩んでおられますか？いろいろなことが周りに起こって来ます。それはあなたの信仰のためにです。神があなたの心を試そうとしているのではありません。あなた自身の心をあなたが知るためにです。口で言うことは簡単です。生きることが難しいと私たちはみな知っています。神はあなたを愛するがゆえに、あなたを訓練し、あなたが真に主に喜ばれ主に用いられる者となっていくために、訓練の機会をくださっているのです。何を言うかではない、どのように生きるかです。どんな時でも主を信頼し、必ず、主の最善が成され、みこころが成されることを信じて生きているかどうかです。そのチャレンジを最後に与えているのです。

私たちも考えなければいけませんね。どのように信仰者として生きているのか？です。信仰の馳せ場をしっかりと走り切らなければいけません！皆さん。もう間もなくです。もう間もなく…、その時まで走れ！走り切りなさい！主を信じ、忍耐を持って！

そのような信仰者としてしっかり歩んでいきましょう。

《考えましょう》

1. 「致命的な傷が直る」という出来事の目的を挙げてください。
2. どうして「獣」を拝むことが「竜」を拝むことになるのでしょうか？
3. どうして「いのちの書」に名が記されている者は獣を拝まないのでしょうか？
4. 今日のみことばから、あなたが教えられた真理を信仰の友と分かち合い、実践のために祈り合ってください。